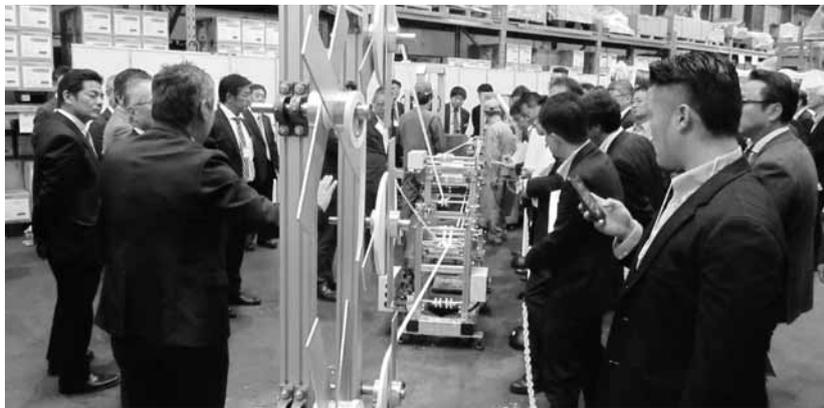


ミヤコシ

紙ストロー生産機「STO-001」を内覧会で披露

2日間で約220人の来場者に 環境問題への取り組みを提案



あいさつする
宮腰社長

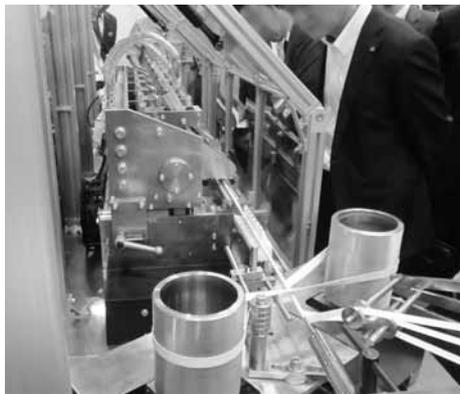
(株)ミヤコシ(宮腰亭社長、本社千葉県習志野市)は10月23・24日の2日間にわたり、千葉県・八千代市の同社POD

事業本部クリーンルーム・デモルームで「紙ストロー生産機内覧会」を開催した。2日間で約220人の来場者が訪れた内覧会では、国産初となる紙ストローの量産製造機「STO-001」を披露した。

内覧会の冒頭、宮腰社長は「紙ストローの限定された市場の内覧会に2日間で220名を超える来場者に正直驚きました。私どもの取り組みが時代の潮流に多少なりとも乗ることが出来ていると安堵しています」と述べた。

同社では、環境問題に関して機械メーカーとして何かできることはないかと以前より模索していたところ、一年前に食品包

内覧会のもよう



材をメインにしているユーザーから「紙ストローの問い合わせが急増している。御社でこの分野に取り組んでもらえないか」との依頼を受けた。

宮腰社長は「弊社の扱いと異なる製品開発にゼロから取り組み、さまざまな分野の機械の情報収集からスタートして、糊メーカー、製紙メーカーの協力を得て今日のお披露目に至った。これまでの機械にはない高品質な紙ストローを安定生産できる」と述べ、「すでに国内に1台、納入され本稼働している」と報告した。紙ストローの製造コストはプラと比べ高いが「環境問題へのアピールが企業イメージアップと印刷による広告媒体として効果がある」とメリットを挙げ、外食産業を中心に紙ストローを導入している状況を紹介した。

続いて、「STO-001」の詳細仕様について説明が行われた。

■基本仕様

給紙が3リール、ストローの内径は6mmφ〜10mmφでストロー長は120mm〜225mm。機械最高速度は150本/分(長さ、用紙により変動)。給紙

幅は12〜28mm、紙厚は0.5mm〜1.0mm。日本製であり、国内メンテナンス体制も完備されている。追加オプションもカスタマイズも可能で、紙ストロー耐水時間は約3時間程度(同社選定の資材の場合)。

「STO001」の各ユニットはリールスタンド、グルーユニット、フォーミングユニット、カット、フォーミングユニット、カッティングユニットで構成されている。リールスタンド部の巻紙径は最大φ600mmで今回の展示は3リールを搭載。オプション選択で最大5リールまで搭載が可能となっている。

グルーユニットは上下2段式で、上段は滑り材を塗工。下段で糊を塗工。フォーミングユニット部では糊が塗工された紙を鉄芯に巻き付け、撚り合わせ、カッティングユニット部でカットする。

「STO001」の特長はタッチパネル入力によるワンマンオペレーションが可能で、ジュース用6mm径からタピオカ用10mm径まで対応。ストローの長さは5本のカッティングナイフでの位置で調整可能で持続可能な開発目標に対応する。

機械、資材共に食品衛生法に準拠している。